

選手たちから一人一言（敬称略）

1区 阿部凜（東中1年）

緊張したけど、2区、3区の選手が速いので安心感があった。今までで一番いい走りができた。来年は全体で1桁順位を目指したい。

2区 住吉秀昭（田村高3年）

総合での区間賞を取ることができず悔しい。町の部2位まで順位を上げて、いい流れで次につなげられたことはよかった。

3区 吉田勇大（東中3年）

前回、町の部区間賞だったので、ことしも狙っていた。家族や友人など、みんなの応援が力になり、区間賞を取ることができた。

4区 神汰輝（会津高2年）

町の部1位をキープしたままタスキをつなげられたことはよかったが、思った走りができず、自分としては悔いの残るレースだった。

5区 長谷川尚大（会津学鳳高3年）

町の部2位を引き離すことはできたが、目標の区間賞を1秒差で逃し、悔いが残る。来年は区間賞を取れるように頑張りたい。

6区 半澤拓見（県北建設事務所）

早い順位でタスキを受けてプレッシャーはあったが、周りを気にせず、自分のペースを守ろうと思って走った。ベストは尽くせた。

7区 阿部直希（猪苗代中3年）

区間賞は取れなかったけれど、優勝できてうれしい。練習はきつかったけど、やってきてよかった。走る楽しさも教わった。

8区 長峰悠真（猪苗代中3年）

自分らしく走ることができた。初めてのふくしま駅伝で優勝することができて、狙っていた区間賞も獲得できた。本当にうれしい。

9区 小林楓羽（猪苗代中1年）

町の部1位を守ろうと思って走った。区間賞は取れなかったけど、優勝できてうれしい。姉（小林萌々選手）の存在も励みになった。

10区 五十嵐修一（明治学院大1年）

痛めていた膝の不安はあったが、前半の選手たちがいい走りをしていたので、とにかくつなげようと思い、全力で走った。

11区 鈴木真奈（猪苗代中2年）

町の部トップでタスキを受け、プレッシャーはあったけど、この順位のまま次につなげようと思って走った。思い通りの走りができた。

12区 影山裕（猪苗代消防署）

結果的に例年通りのタイムだったが、状態が悪く、きついレースだった。何とか順位を守ってタスキを渡そうと思い、力を振り絞った。

13区 松崎政継（一箕小教諭）

疲れを感じず、最高の走りができた。町の部2位に差をつけてタスキを渡せた。初優勝に貢献することができて、達成感でいっぱい。

14区 古川裕隆（会津学鳳高1年）

自分としては目標のタイムに届かず悔いは残るが、初優勝のメンバーになれてうれしい。来年も走って2連覇に貢献したい。

15区 小林萌々（猪苗代中3年）

タスキをつなぐことができず悔しかったけど、思い通りの走りができた。チームに貢献できたと思う。高校でも陸上を続けたい。

16区 小川広（郡山自衛隊）

たまたまアンカーを任せてもらったので、優勝のゴールテープを切ることができた。頑張っつないでくれたみんなのおかげ。



- 1_15区 小林萌々選手** **2_** 冷静沈着な走りを見せた6区 半澤拓見選手 **3_** 7区 阿部直希選手
4_ ゴールテープを切るアンカーの小川広選手
5_ 5区 長谷川尚大選手 **6_14区 古川裕隆選手**
7_ 3区 吉田勇大選手 **8_** 9区 小林楓羽選手
9_ 2区 住吉秀昭選手 **10_** 8区 長峰悠真選手
11_10区 五十嵐修一選手 **12_13区 松崎政継選手**
13_ チームメイトの応援に駆け付けた東中学校陸上部の部員たち **14_11区 鈴木真奈選手**
15_ 1区 阿部凜選手 **16_12区 影山裕主将**
17_ 町応援団の前を走る4区 神汰輝選手

念願の町の部初優勝（総合10位）。選手やスタッフはもちろん、応援のため沿道に駆け付けた人やテレビ・ラジオに釘付けになった人など、そのすべてが歓喜した瞬間だった。

の思いを背負い力走。優勝を確信した小川選手は、喜びをかみしめるように何度もガッツポーズし、優勝のゴールテープを切った。

特集 初Vへのキセキ

町の部初優勝という偉業に、町中が歓喜に沸いたことしのふくしま駅伝
 しかし、優勝までの道のりは決して平坦なものではなかった
 今月号では、初優勝までの軌跡を、足跡を紹介する

続く選手らも、市の部の有力選手たちと抜きつ抜かれつのデッドヒートを展開。8区長峰悠真選手、13区の松崎政継選手が町の部区間賞を獲得するなど、すべての選手が粘り強い走りを見せ、町の部1位を一度も譲らなかった。

最終の第15中継所では、わずかの差でタスキをつなぐことができなかったが、一斉スタートとなった16区では、アンカーの小川広選手がチームメイトたち

ら女子エース区間の1区を任された阿部凜選手が町の部10位、総合で22位と力走。2区の住吉秀昭選手と3区の吉田勇大選手が共に町の部区間賞（吉田選手は全体でも区間賞）の快走で、一気に町の部トップ、総合4位に躍り出た。

全16区間、全長95.1キロのコースで開催されたこの大会には、53チーム、848人が参加。

レースでは、中学1年生ながら女子エース区間の1区を任された阿部凜選手が町の部10位、総合で22位と力走。2区の住吉秀昭選手と3区の吉田勇大選手が共に町の部区間賞（吉田選手は全体でも区間賞）の快走で、一気に町の部トップ、総合4位に躍り出た。

第26回市町村対抗県縦断駅伝競走大会（ふくしま駅伝）は11月16日、白河カタルズスポーツパーク陸上競技場をスタート、県庁前をゴールに開かれ、本町チームが町の部で念願の初優勝を果たした。

念願の初優勝

つないだ歴史

決して順風満帆ではなかった、初優勝までの道のり
つないできた歴史があるから、現在がある
これまでの大会の歴史を振り返る

【当時の広報記事】



第2回大会
平成元年の第1回大会は、44市町村の参加にとどまったが、この第2回では77市町村が参加。徐々に県をあげての大会になっていった。本町チームは、合同練習を実施するなどして、着実に順位を上げていった。

平成元年に始まったふくしま駅伝。本町チームは、第1回大会から参加した。しかし、チーム編成や練習など、何もかもが手さぐりの状態。今のような合同練習も行っておらず、ぶっつけ本番に近い状態で大会に臨んだ。

当時のチームは、猪苗代走友会（現在の猪苗代AC）のメンバーが中心。五十嵐幸夫前監督や佐藤勝弘コーチらが、選手としてチームをけん引した。

2回目の大会からは、本番に向けて計画的に練習するようになった。ここからいい流れができ、本町チームは徐々に順位を上げていく。第7回大会では初の1桁順位となる町の部9位入賞。翌年の第8回大会では8位に入賞した。

しかし、翌年から苦しい時期が続く。なかなかメンバーがそろわず、第9回大会では町の部30位と、前回から大幅に順位を下げる。ここから第12回大会まで、町の部30位前後をさまようこととなる。さまざまな事情が重なり、大会不参加を考えたこともあった。

この低迷期を支え、次の世代につないだのがふるさと選手や転勤族だった。第1回大会からふくしま駅伝に携わってきた田代剛コーチは「一度参加をやめてしまうと、モチベーションが下がり、なかなか立ち直れない可能性があった。彼らがチームに加わってくれたおかげで、なんとかタスキがつながった」と話す。

第13回大会では、前年の町の部31位から10位へと大幅に順位を上げ、敢闘賞を獲得。前主将の五十嵐史朗選手、現主将の影山裕選手らが高校生になり、後に女子のエースとなる齋藤梓乃選手が中学1年生で華々しいデビューを飾るなど、新しい時代の幕が開けた。

2年後の第15回大会では過去最高となる町の部3位入賞。五十嵐前監督の進めてきた中・高校生などの強化策が実を結び始めた。

以後は毎回、町の部1桁順位を記録。第25回大会までに町の部で2位を3回、3位を2回、4位を2回獲得。優勝争いができるまでになった。

そして迎えたことしの大会、今までの積み重ねが実を結び、念願の初優勝を果たした。

選手たちから胴上げされ、宙を舞う渡部敏弘監督のそばには、途絶えることなくつなぎ続けてきた歴史を知る、五十嵐前監督の姿―。

「幸夫さんも胴上げしよう」誰からともなく声が上がった。



第25回大会
選手、コーチから監督へと、第1回大会から本大会に参加していた五十嵐幸夫監督に、表彰状が送られた。大会開始から四半世紀、頑張り続けた選手たちの思いや町民の皆さんの応援が、26回大会に見えないタスキとなつてつながったのかもしれない。



第19回大会
暗闇の中、車のヘッドライトを頼りに練習する選手たち。町民の皆さんに、この努力を知って応援してほしいと、初めて大会前に広報紙で特集を組んだ大会。渡部咲選手の2年連続区間賞などで、町の部8位、総合22位を獲得。



第15回大会
五十嵐前監督が進めてきた中・高校生の強化策が徐々に実を結び始め、町の部3位、総合9位と過去最高の成績を上げる。翌年の第16回大会でも、町の部3位、総合8位の好成績。以降、入賞の常連になり、県内に猪苗代の名を轟かせる。

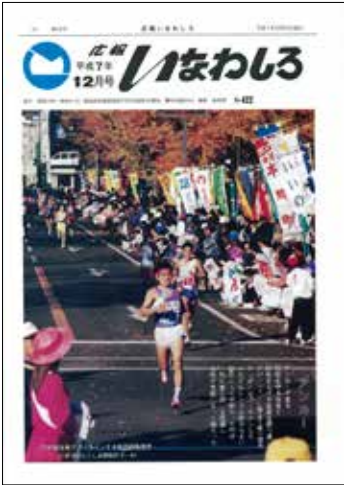
【過去のチーム成績】

第1回	30位（39位）
第2回	20位（28位）
第3回	11位（20位）
第4回	13位（26位）
第5回	12位（24位）
第6回	15位（26位）
第7回	9位（16位）
第8回	8位（19位）
第9回	30位（48位）
第10回	34位（55位）
第11回	29位（47位）
第12回	31位（48位）
第13回	10位（19位）
第14回	12位（21位）
第15回	3位（9位）
第16回	3位（8位）
第17回	7位（16位）
第18回	2位（14位）
第19回	8位（22位）
第20回	6位（20位）
第21回	5位（17位）
第22回	2位（13位）
第23回	2位（11位）
第24回	4位（16位）
第25回	4位（13位）
第26回	優勝（10位）

第3回大会までは町村の部 第4回大会以降は町の部の順位。かつこ内は総合順位



第9回大会
初めからずっと成績が良かったわけではない。選手が集まらず、参加辞退を検討した時期すらあった。この大会以降、数年間順位的には低迷するが、選手、関係者の努力により何とか出場を続けることができた。町でも何とか盛り上げようと、広報で大きく大会を報じた。



第7回大会
ふくしま駅伝の選手が広報の表紙を飾ったのは、第4回が最初。そのときのアンカーが、佐藤勝弘コーチ。町の部9位に入賞し、初めての1桁順位を獲得した第7回大会でも同コーチが表紙を飾った。第8回大会では、笠間三四郎さんが、本町チーム初の町の部区間賞に輝いた。



表彰式後に記念撮影。走った選手だけでなく、当日控えに回った選手、コーチ、監督、チームが一丸となってつかんだ勝利です
みんなで勝ち取った優勝旗と優勝杯は、1年間、カメリーナに展示します。ぜひご覧ください



解団式で初優勝の喜びを分かち合う影山主将(左)と五十嵐コーチ

特集「初Vへのキセキ」終わり

第40回、50回大会を迎えた時に、あの大会が今につながったと言われるようなキセキの一つとなるように。

私たちはつなげていくタスキは、選手たちを応援する輪となつて横に広がっていくタスキだ。このタスキは、もうすでにつながり始めている。皆さんの手元にそのタスキが届いたのなら、しっかりと次の人に手渡してほしい。

26回の大会を通じて、選手や関係者がつなげてきたタスキは、優勝という願いにつながつた。そのタスキは、これからもつながっていく。

本町チームは、来年から他の町から目標とされ、追われる立場になる。きつと、これまで以上の努力が求められることになるだろう。そんな苦しい立場に立たされるチームのため、選手たちのために、私たちにできることは、やはりつながることではないだろうか。

私たちはつなげていくタスキは、選手たちを応援する輪となつて横に広がっていくタスキだ。このタスキは、もうすでにつながり始めている。皆さんの手元にそのタスキが届いたのなら、しっかりと次の人に手渡してほしい。

未来へつなぐタスキ

タスキは最初からタスキなのではない。長い布の端を結び、つなぐことで、初めてタスキになり、手から手へとつながれ始める。

五十嵐史朗コーチと影山裕主将は同級生。五十嵐コーチは、「来年こそは優勝を狙える。そのためには、頼れる主将が必要」と影山選手に次期主将を任せた。影山選手は「主将は重責。しかし、あいつの頼みならやるしかない」と主将を引き受けた。「いつかは優勝しよう」と約束し、共に選手としてチームを支え続けてきた二人が、チームのためにタスキをつないだ。

陸上競技経験者がチームを立ち上げ、子どもたちの育成のために頑張る。選手だった人がコーチや監督になり、自身の経

選手育成の取り組みが実を結んだ

このたびのふくしま駅伝において、町の部初優勝という偉業を達成できましたことは、猪苗代町民としても喜びであり、関係者の皆さんに感謝しております。

レースでは選手一人一人が、監督、コーチの予想通り、あるいは予想を超える走りをしてくれたことが優勝という結果につながりました。総監督としてその場にいられたことを大変幸せに思います。

総監督として今回で5年目。若い世代の育成に力を入れてきた結果、常に上位に入賞できる力がついてきました。これは、ことしの女子選手が中学生ばかりであることにも現れていると思います。

その影には、選手たちの努力はもちろん、猪苗代T&Fの指導により、小学生のレベルが上がったこともあげられます。この年代から走り始めた子どもたちが、中・高校生となって駅伝チームの中心選手に育つなど、チームの底上げにつながっています。

このように、町ぐるみで選手の強化に当たったことが、躍進の原動力ではないかと思います。

今後とも、町民の皆さまのご理解、ご協力そして熱い応援をお願いいたします。感謝の言葉といたします。本当にありがとうございました。



よしお 二瓶 芳雄 総監督
Yoshio Nihei

つなぐ未来へ

現在は、未来からすれば過去。歴史の1ページだ

10年、20年後、今大会を栄光の未来の始まりにするため

今、わたしたちにできることは

長い積み重ねの結果が優勝につながった

前半(1～6区)でいい流れを作り、後半(7～16区)でその流れを維持しつつアンカーヘタスキをつないでゴールという思い描いたとおりのレース展開ができました。持っている力を存分に発揮してくれた選手たちに感謝します。

自分が高校生の時から監督だった五十嵐前監督時代からの積み重ね、礎があったからこそ、今回たまたま私が監督になったタイミングで優勝することができたのだと思います。

選手だけではいい練習はできません。長い間、一緒に練習に参加してくれた皆さんや支えてくれたコーチ陣にも感謝し

ています。今大会のチームメンバー以外の中学生なども練習に参加してくれました。こういったことも大きなプラスになっていると思います。

また、控えの選手たちは、当日走るメンバーが全力を出せるよう、献身的にサポートをしてくれました。彼らの活躍もなくてはならないものです。来年は、大会でその力を発揮してほしいです。

最後に、全面的に支えてくださった町生涯学習課の皆さんや応援してくださったすべての町民の皆さんに感謝を申し上げます。来年も選手一丸となって頑張りますので、応援よろしくお願いします。



としひろ 渡部 敏弘 監督
Toshihiro Watanabe